

童謡のドイツ語訳への試み

An Attempt to Translate Japanese Children's Songs into German

坂本 利枝子

要旨

我が国の子どもの歌には、わらべ唄、唱歌、童謡、昭和以降に作られた子どもの歌等があるが、明治大正期に外国語の子どもの歌に日本語の歌詞をつけ、今日まで歌われてきた曲もある。たとえば、「ちょうちょう」(Hänschen klein : ハンス坊や)、「霞か雲か」(Alle Vögel sind schon da : 小鳥たちがやって来た)、「こぎつね」(Fuchs, du hast die Gans gestohlen : きつねさん、きみはガチョウを盗んだね)等、原詩とは異なる内容の日本語歌詞がつけられてはいるが、日本語の歌として愛唱されてきた。これは、日本語訳詩と旋律が一致し、子どもたちにとって歌いやすい、わかりやすいという点からではなかろうか。

そこで、筆者は大正期に日本を代表する詩人、作曲家によって作られ、長く親しまれ歌い継がれてきた童謡「赤い鳥小鳥」、「揺籃のうた」、「シャボン玉」のドイツ語訳を試みた。ドイツ語訳詩と音楽的な拍の強弱の一致、音符への歌詞の配置等苦心したが、今後、さらに自然で子どもたちが歌いやすい訳詩を探っていきたいと考えている。このような試みによって、世界の子どもたちが日本の童謡を知る端緒となれば幸いである。

キーワード：童謡、子どもの歌、ドイツ語訳

I. はじめに

幼少期に、周りの大人や友達と一緒に楽しく歌を歌ったことは、心の奥底に無意識に残り、その記憶は老年になっても消えることなく、折りにふれて子ども時代の思い出とともに蘇ってくるものではないだろうか。上は、童謡について、総称的なニュアンスでもちいられる場合には、〈子どものうたう歌の全般〉を意味しており、近代以前よりの〈わらべ唄〉はもちろん、明治期に学校教育の場を主軸として興った〈唱歌〉、その唱歌を乗り越えようとの意図で大正期に登場した〈童謡〉、および第二次世界大戦後に現実の子どもの距離を縮めようとの考えから新称された〈子どもの歌〉のすべてを含む。しかし一般的には、唱歌を克服して大正期に大きく花開いた童心讚美主義的な子どもの詩歌である〈童謡〉を指し、とりわけ音楽家によって作曲され〈歌曲〉となったものを意味している¹⁾、と述べている。このように、我が国において子どもの歌は時代と共に豊かに発展し、親から子へと受け継がれてきた文化的な遺産であると言える。このような歌の中で、外国曲であるにも関わらず、長年親しまれ歌われてきた曲がある。例えば、「ちょうちょう」(Hänschen klein : ハンス坊や)²⁾、「霞か雲か」(Alle Vögel sind schon da : 小鳥たちがやって来た)、「こぎつね」(Fuchs, du hast die Gans gestohlen : きつねさん、きみはガチョウを盗んだね)³⁾等は、原詩とは異なる日本語歌詞がつけられてはいるが、日本語の歌として愛唱されてきた。これは、日本語訳詩の言葉と楽曲のリズムが一致し、子どもたちにとって歌いやすい、わかりや

すいという点からではなかろうか。

大正期に盛んに創作された童謡は、前述したように明治期に学校教育の場を主軸として〈唱歌〉が興り、その〈唱歌〉を克服しようとの意図で誕生したものである。金田一は、長谷川良夫氏は日本の唱歌の様式の規範は、欧州の18、19世紀の民謡曲だと言われる。私は「讚美歌」の形がお手本になっていると言いたい⁴⁾、と述べている。童謡は、明治期に欧米より伝えられた欧州の民謡や讚美歌の機能¹⁾を踏襲しながらも、旋律は言葉のアクセントを反映させたものが多く⁵⁾、曲調も豊かに発展し、歌曲として作曲されたものであり、訳詩と音楽のリズムが一致すれば、ドイツ語で歌っても不自然さを感じさせないであろうと考えた。

そこで、大正期に日本を代表する詩人、作曲家によって作られ、今日まで親しまれ歌い継がれてきた童謡「赤い鳥小鳥」、「揺籃のうた」、「シャボン玉」のドイツ語訳を行うこととした。音楽は国境を超えて人々を結びつける力があり、ドイツ語訳詩をつけることで世界の子どもたちが日本の歌を知り、ひいては日本や日本文化への興味や関心をもつきっかけになるであろうと考え、本研究に取り組むこととした。

II. 詩のドイツ語訳および解説

(1) 「赤い鳥小鳥」 北原白秋作詩 成田為三作曲

「赤い鳥小鳥」	「Roter Vogel, Vögelchen」
赤い鳥、小鳥	^{赤い} ^鳥 ^{小鳥} Roter Vogel, Vögelchen,
なぜなぜ赤い	^{なぜ} ^{お前は} Warum, warum bist du rot?
赤い実をたべた	^実 ^{私は} ^{食べた} Rot' Beeren hab' ich gegessen.
白い鳥、小鳥	^{白い} Weißer Vogel, Vögelchen,
なぜなぜ白い	Warum, warum bist du weiß?
白い実をたべた	Weiß' Beeren hab' ich gegessen.
青い鳥、小鳥	^{青い} Blauer Vogel, Vögelchen,
なぜなぜ青い	Warum, warum bist du blau?
青い実をたべた	Blau' Beeren hab' ich gegessen.

1918年、児童雑誌『赤い鳥10月号』に詩が発表され、1年半後の1920年『赤い鳥4月号』に成田為三の作曲譜が掲載された。白秋は、子ども向けのわらべ唄物語『お話・日本の童謡』（1924年・アルス）において、「赤い鳥小鳥」は北海道帯広地方で歌われていた子守唄を換骨奪胎して作ったとしている。以下は、その子守唄の歌詞である。

¹⁾ 18～19世紀の西洋音楽における長調、短調の調性が明確な曲で、調の中心はその音階の主音であり、主和音、属和音、下属和音の3つの和音の機能を重視する和声理論。

ねんねの寝た間に、何しよいの
 小豆餅の、栃餅や
 赤い山へ持って行けば、赤い鳥がつつく
 青い山へ持って行けば、青い鳥がつつく
 白い山へ持って行けば、白い鳥がつつく

白秋の童謡思想の根幹は、〈童心を童謡をもって表現し、そしてその根底を日本の民族伝統に置いていること〉であり、上は、白秋にとって北海道のわらべ唄の発想に立って創造に成功したこの1篇は記念碑的な意味を持っていた⁶⁾としている。

「赤い鳥小鳥」は、「Der rote Vogel, kleine Vogel」と訳せるが、メロディーに当てはめると1拍目表拍に定冠詞「der」が配置されることになり、1拍目裏拍に「rote (赤い)」となる(譜例1)。音楽的な拍のアクセントは1拍目表拍であり、この場合、「der」ではなく鳥の色である「rot (赤)」が大事であり、1拍目表拍になるよう「赤い鳥」を「Roter Vogel」とした(譜例2)。「小鳥: kleine Vogel」は音符に当てはめると「klein' Vogel」となるが(譜例1)、小さく可愛らしいもの、またより自然に音符に配置できるよう、鳥の縮小形である「Vögelchen」とし(譜例2)、第2節、第3節も同様とした。筆者が実際に歌って感じたことだが、「Der rote Vogel, klein' Vogel」よりも「Roter Vogel, Vögelchen」のほうが、メロディーに沿って歌いやすかった。これは、「Der rote Vogel, klein' Vogel」の母音が「e oe oe, ai oe」であるのに対し、「Roter Vogel, Vögelchen」の母音は「oa oe, öee」であるため、後者のほうが子どもにとっても発音しやすく歌いやすいと考えた。この詩の解釈として、子どもが鳥に向かって、なぜお前はその色なのかと尋ね、鳥がその色の実を食べたからと答えているというもの、または、子どもが母親等の第三者に、なぜ鳥はその色なのかと尋ね、第三者は鳥がその色の実を食べたからと答えているもの、このほかに子どもが自問自答しているとも考えられる。原詩では主語が曖昧であるため、このようにいくつかの解釈が考えられる。上はこの詩の解釈について、幼児が問い小鳥が答えている問答体とも第三者が問うて第三者が説明しているスタイルとも取れるが、幼児にとっては前者の実感が強いだろう⁷⁾としている。ドイツ語では主語により動詞の変化が異なるため、主語を確定する必要がある。筆者は上のように、子どもが鳥になぜその色か尋ねているという解釈がより自然なのではないかと考え、翻訳を行った。第1節2行目で主語「du」は「Roter Vogel, Vögelchen」を指し、3行目「ich」もまた「Roter Vogel, Vögelchen」となる。「Rot' Beeren hab' ich gegessen。」は、本来の語順としては、「Ich habe rote Beeren gegessen。」であるが、1拍目が強拍であり、フレーズの始まりが2点ニ(D5)の音で子どもの歌としては比較的高い音であることから、「Rot' Beeren」を強調したく、また「ich」の母音「i」より「rot'」の「o」の開けた母音のほうが歌いやすいであろうと考え、文頭とした。第2節、第3節も同様である。

(譜例1)

1 拍目
表 裏

Der ro- te Vo- gel klein' Vo- gel,

(譜例2)

1 拍目
表 裏

Ro- ter Vo- gel, Vö- gel- chen,

(2) 「揺籃のうた」 北原白秋作詩 草川信作曲

「揺籃のうた」	「Wiegenlied」
ゆりかごのうたを カナリヤがうたうよ ねんねこ ねんねこ ねんねこよ	^{～のそばで} ^{お前の} ^{ゆりかご} ^{歌う} Bei deiner Wiege singt ^{1羽の} ^{カナリヤが} ein Kanarienvogel, ^{眠れ} ^{私の} ^{子ども} Schlafe, schlafe, schlafe, mein Kind.
ゆりかごのうえに びわの実がゆれるよ ねんねこ ねんねこ ねんねこよ	^{～の上に} ^{揺れる} Auf deiner Wiege schwingen ^{きれいな} ^{黄色の} ^{カリンの実} schöne gelbe Mispeln, Schlafe, schlafe, schlafe, mein Kind.
ゆりかごのつなを きねずみがゆするよ ねんねこ ねんねこ ねんねこよ	^{～を} ^{つな} An der Schnur deiner Wiege ^{揺り動かす、ゆする} ^{1匹の} ^{かわいい} ^{リス} schaukelt ein süß Eichhörnchen, Schlafe, schlafe, schlafe, mein Kind.
ゆりかごのゆめに きいろい月がかかるよ ねんねこ ねんねこ ねんねこよ	^{～に} ^{ゆりかごの夢} In deiner Wiegentraum ^{輝いている} ^{黄色い} ^月 strahlt der gelbe Mond, Schlafe, schlafe, schlafe, mein Kind.

詩は、1921年実業之日本社の雑誌『小学女生』8月号に発表された。翌1922年、草川が曲をつけ、『赤い鳥』11月号の『赤い鳥曲譜集』に掲載された。上は、リフレインの「ねんねこ」は日本の眠らせ唄の慣用句で、〈寝よ寝よ〉が優しく訛って出来たもので、日本の子守唄とりわけ眠らせ唄の伝統に立つものと見るべきである⁸⁾としている。

第1節の「ゆりかごのうたを カナリヤがうたうよ」は、直訳すると「ein Kanarienvogel singt ein Wiegenlied.」となる。第2節「ゆりかごのうえに：Auf deiner Wiege」、第3節「ゆりかごのつなを：An der Schnur deiner Wiege」、第4節「ゆりかごのゆめに：In deiner Wiegentraum」というようにドイツ語訳では前置詞から始まっていることから、訳詩としての統一感を出すため、第1節を「Bei deiner Wiege singt ein Kanarienvogel：お前のゆりかごのそばでカナリヤがうたう」とした。第2節の「枇杷の実」は、ドイツ語圏ではあまり馴染のない果物であるため、「die Mispel（複数形 Mispeln）：西洋カリン」とし、「schöne：きれいな」と gelbe：黄色の」を付け、完熟した実を表した。また、ドイツ語で「月：der Mond」の色は、「das Silver des Mondlichts：銀色の月明かり」「Silverglanz des Mondes / Silverschimmer des Mondes：月光の銀色の優しい輝き」⁹⁾「Geuß, lieber Mond, geuß deine Silverflimmer¹⁰⁾：親愛な月よ、お前の銀の光をそそいでおくれ」のようにしばしば銀色で表現される。「黄色い月」というのは日本的な表現と言えるが、カナリヤの黄色、枇杷の実も黄色、月も黄色で、黄色は暖色のもっとも優位にあるものであり、人の心にあたたかさ・明るさ・安らかさを感じさせ、〈眠らせ唄〉として適わしいものになっている¹¹⁾とあり、詩全体が黄色の色彩で表現されていることから「der gelbe Mond：黄色い月」とした。

(3) 「シャボン玉」 野口雨情作詩 中山晋平作曲

「シャボン玉」	「Seifenblasen」
しゃぼん玉飛んだ	<small>シャボン玉</small> <small>飛んだ</small> Seifenblasen flogen,
屋根まで飛んだ	<small>～の方へ</small> <small>屋根</small> Auf das Dach sie flogen,
屋根まで飛んで	Auf das Dach sie flogen,
こわれて消えた	<small>こわれた</small> <small>そして</small> <small>消えた</small> Platzen und verschwanden.
しゃぼん玉消えた	Seifenblasen platzten,
とばずに消えた	<small>～せずに</small> Flogen nicht, verschwanden,
うまれてすぐに	<small>すぐに</small> <small>したときに</small> <small>生まれた</small> Gleich als sie entstanden,
こわれて消えた	Platzen und verschwanden.
風 風 吹くな	<small>風</small> <small>吹く</small> <small>～でなく</small> <small>そんなに</small> <small>強く</small> Wind, o wind, weh' nicht so stark!
しゃぼん玉飛ばそ	<small>私たちは</small> <small>～する、つくる</small> Wir machen Seifenblasen.

1922 年児童雑誌『金の塔』に詩は発表され、これに中山晋平が曲をつけ、1923 年に作品集『童謡小曲 第3集』で発表し、次第に広まっていったと言われる。雨情は「しゃぼん玉」と平仮名書きにしているが、晋平の楽譜では「シャボン玉」と片仮名書きとなっている。雨情はこの遊びを日本的なもの、晋平は外国渡りのものと受け取っていた¹²⁾ のことである。シャボン玉遊びは、日本では古くから子どもたちの間で行われていたと考えられるが、時代とともに子どもたちにとって身近な楽しい遊びとなっていたのは言うまでもない。筆者は、かつてオーストリアで子どもたちのシャボン玉遊びを見たことがあったが、シャボン玉を沢山飛ばして遊んだり、風に吹かれて舞い上がるシャボン玉をつかまえようとする姿はとても楽しそうであった。「シャボン玉」の詩は、洋の東西を問わず子どもたちが共感できるものである。

この詩をドイツ語に訳するにあたり、まず曲のメロディーラインに着目してみた。歌の旋律は、イ (A3) から始まり、歌の3小節目で2点ニ (D5) まで上昇している (譜例3)。これは、シャボン玉が風に乗って空高く飛んでいく様子を音の高さでも表していると言える。同様に、シャボン玉がこわれて消えていく様子も、日本語の歌詞に合わせてメロディーも下降していき、1点ニ (D4) で終わり、詩の情景が効果的に作曲されている (譜例4)。ドイツ語訳で歌った際にも詩と音楽が一致するよう心がけ、ドイツ語訳に取り組んだ。

第1節1行目シャボン玉「飛んだ」は、「fliegen : 飛ぶ」の過去形「flog」の3人称複数形「flogen」とし、4行目の「こわれて」は「platzen : 破裂する、はじける」の過去形「platzte」の3人称複数形「platzten」、「きえた」は「verschwinden : 消える、なくなる」の過去形「verschwand」の3人称複数形「verschwanden」とした。第2節1行目の「しゃぼん玉消えた」は、直訳すると「Seifenblasen verschwanden」となる。「verschwanden」の「ver-」は非分離動詞の前綴りであるため、アクセントは動詞本体の「schwán - den」となる。しかし、音符へ配置すると (譜例5) のように強拍の1拍目表拍に「ver-」がくることになり、本来のアクセントとずれてしまう。そこで、ここでは意図的に「platzten」と訳し、「plätz - ten」のアクセントと1拍目表拍が一致す

るようにした(譜例6)。第3節「風 風 吹くな」は、ドイツ語訳では「Wind, o wind, wehe nicht!」となり、これを音符に配置すると(譜例7)もしくは(譜例8)のようになり、リズムを変えざるをえない。ここでは、メロディーのリズムを活かしたいと考え、敢えて「Wind, o wind, weh' nicht so stark! : 風、おお、風、そんなに強く吹くな」と訳し、音符へ配置した(譜例9)。

(譜例3)

1. しゃぼんだまとんだやねまでとんだ
2. しゃぼんだまきえたとばずにきえた

(譜例4)

こわれてきえた
こわれてきえた

(譜例5)

1拍目
表裏

Sei- fen- bla- sen ver- schw- den,

(譜例6)

1拍目
表裏

Sei- fen- bla- sen platz - ten,

(譜例7)

Wind, o Wind, _____ we- he nicht!

(譜例8)

Wind, o Wind, we- he nicht!

(譜例9)

Wind, o Wind, weh' nicht so stark!

Ⅲ. ドイツ語訳楽譜

以下は、ドイツ語訳をつけた楽譜である。伴奏譜は、『日本童謡唱歌体系 第I巻』¹³⁾より引用した。日本語表記の発想標語もドイツ語に訳した。

Roter Vogel, Vögelchen

Gedicht von Hakushuh Kitahara
Übersetzung von Rieko Sakamoto
Komponiert von Tamezoh Narita

Allegretto

Singstimme

Klavier

mp

1. Ro- ter Vo- gel, Vö- gel- chen,
2. Wei- ßer Vo- gel, Vö- gel- chen,
3. Blau- er Vo- gel, Vö- gel- chen,

5 *mf*

Wa- rum, Wa- rum bist du rot, Rot' Bee- ren hab' ich ge- ge- ssen.
Wa- rum, Wa- rum bist du weiß, Weiß' Bee- ren hab' ich ge- ge- ssen.
Wa- rum, Wa- rum bist du blau, Blau' Bee- ren hab' ich ge- ge- ssen.

mf

Wiegenlied

Gedicht von Hakushuh Kitahara
Übersetzung von Rieko Sakamoto
Komponiert von Shin Kusakawa

leicht ♩ = 56

Singstimme

Klavier

p

5 *p*

1. Bei dei-ner Wie-ge singt ein Ka-na-rien-vo-gel,
2. Auf dei-ner Wie-ge schwin-gen schö-ne-gel-be Mis-peln,
3. An-der Schnur deiner Wie-ge schau-kelt ein süß' Eich-hörn-chen,
4. In dei-ner Wie-ge-traum strahlt der gel-be Mond,

9
schla-fe, schla-fe, schla-fe, mein Kind.

Seifenblasen

Gedicht von Ujoh Noguchi
Übersetzung von Rieko Sakamoto
Komponiert von Shinpei Nakayama

fröhlich ♩ = 72

Singstimme

Klavier

1. Sei- fen- bla- sen
2. Sei- fen- bla- sen

6
flo - gen, auf das Dach sie flo - gen, auf das Dach sie flo - gen,
platz - ten, flo- gen nicht, ver- schwan - den, gleich als sie ent- stan - den,

11
platz- ten und ver- schwan - den. Wind, o wind, weh' nicht so stark! Wir mach- en Sei- fen-
platz- ten und ver- schwan - den.

16
bla - sen.

IV. おわりに

これらのドイツ語訳の童謡を、筆者は令和6年度全国大学音楽教育学会東北地区学会にて研究演奏発表した。今回、紀要執筆にあたり、再度ドイツ語訳を見直し、さらに解説を加えまとめた。学会参加者からは、ドイツリートのような雰囲気が感じられ、面白かったとの感想をいただいた。筆者の翻訳の技術はまだ未熟であるが、このような感想をいただいたことから、童謡とはまさに子どものための〈Liedchen: 小さな歌曲〉として創作されたものと再認識した。ドイツ語に翻訳するにあたり、原詩の内容を変えずにメロディーの流れにふさわしく、子どもがわかりやすいようなドイツ語訳となるように心がけた。ドイツ語の抑揚と音楽的な拍の強弱の一致、音符への歌詞の配置等苦心したが、今後、さらに自然で子どもたちが歌いやすい訳詩を探っていきたいと考えている。このような試みによって、世界の子どもたちが日本の童謡と出会い、さらに異なる文化の歌を通じて他国への関心を持ち、世界の多様性を知る端緒となれば幸いである。

引用文献・参考文献

- 1) 上笙一郎編 (2005年) 『日本童謡事典』 東京堂出版 P260
- 2) Gabrielle Dijon, Bine Cordes (1996) 『Alle Vögel sind schon da—Die schönsten Kinderlieder』 Seehamer Verlag GmbH, Weyarn P16
- 3) Ernst-Lothar von Knorr, Paul Friedrich Schrber (2001) 『Kinderlieder』 Philipp Reclam GmbH & Co. Stuttgart P52, P56
- 4) 金田一春彦/安西愛子編 (1977年) 『日本の唱歌 [上] 明治編』 講談社文庫 P5
- 5) 熊谷美絵 (2022年) 『時代の変容と子どもの歌についての一考察』 近畿大学九州短期大学図書館 P9
- 6) 上笙一郎編 (2005年) 『日本童謡事典』 東京堂出版 P13
- 7) 同 P13
- 8) 同 P417
- 9) 満足忍 (2011年) 『ドイツ語における色彩語の意味とグリムメルヒェン (2)』 日本大学歯学部紀要 39 P80-P81
- 10) Werner Oehlmann (1993) 『Reclams Liedführer』 Philipp Reclam GmbH & Co. Stuttgart P233
Hölty 「An den Mond」
- 11) 上笙一郎編 (2005年) 『日本童謡事典』 東京堂出版 P190
- 12) 同 P417
- 13) 藤田圭雄 中田喜直 阪田寛夫 湯山昭監修 (1997年) 『日本童謡唱歌大系 第I巻』 東京書籍 P23, P226-P227, P45

執筆者紹介 (所属)

坂本 利枝子

八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 講師